

ソフトウェアの品質管理 日科技連ソフトウェア品質管理シリーズ1

264頁 定価 3,000円

本書の冒頭で述べられているように、1980年代は情報化社会の時代、とりわけソフトウェアの時代であるといえるであろう。しかしながら、ソフトウェアの生産が巨大な工業となりつつある一方で、他の工業に比べてごく短い歴史しかもたず、あまりにも急速な生産活動の膨張に、生産技術の進歩が追いつかないのが現状である。そのなかでも特に最近クローズアップされてきたのが、生産管理技術の近代化の必要性である。

このような状況を背景に、財団法人科学技術連盟では、1980年よりソフトウェア生産管理研究委員会を設置して、調査・研究をすすめてきたが、その成果の集大成として日科技連ソフトウェア品質管理シリーズの刊行が企画された。本書はその第1巻であり、ソフトウェア生産管理の基本的事項について概観することを目的としている。本書の構成は以下に示すとおりである。

- 第1章 ソフトウェア工学の歴史
- 第2章 日本的品質管理
- 第3章 ソフトウェアの計量化
- 第4章 統計的手法の活用
- 第5章 職場小集団活動
- 第6章 標準化

本書の特徴は、これまでのソフトウェア生産管理関連の書物が、ソフトウェア工学の成果を中心とし、どちらかといえば、ソフトウェアの世界で閉じた内容でありがちであったのに対して、物づくりの工業での大きな成果であるQC、IEおよびORの側面からソフトウェア生産を見める立場に立っていることである。ソフトウェアが工業製品の1つであることは、まぎれもない事実であるが故に、生産管理技術として、物づくりの工業での成果を導入するのは当然のように思えるが、少なくとも極く最近までは、さほど成功しているとは言えない。本書でも述べられているように、高学歴者による知的作業が主体であり、かつ工程や仕様はいうにおよばず作業自体すら具体的に見えにくく、計量化しにくいことが1つの理由であろう。QC、IEは物づくりの現場（ブルーカラー主体）で大きな成功をおさめたが、上記のような場

面でのどのように展開すべきかは、今後の課題である。しかし、特にわが国においては、職場小集団活動をはじめとするIEの成果が、戦後の工業の発展に重要な役割をはたしたのは周知の事実であり、この成果をソフトウェア生産に適用する道を開くことは、わが国の将来の鍵になるといってもよいのではなからうか。このような観点から、本書は期待をもって読まれるべき1巻である。

本書の構成中、第1章および第3章がソフトウェア独自の内容であり、他がQC、IEおよびORの基本的手法と、ソフトウェアへの適用に対する考え方に論点がおかれている。

第1章では、ソフトウェア生産とソフトウェア工学の歴史と現状が簡潔にまとめられており、かつ読者をしてIE家的立場でソフトウェアを見直すように、自然にしむける。そして、これこそが本書の主たる目的であるように思われる。

第2章以下のQC、IEおよびORの手法の概要は、大変わかりやすい内容になっているが、これらの分野に経験の浅いソフトウェア技術者にとっては、ソフトウェア生産への適用を具体的に想像するに十分な説得性にややかけるような感を受ける。

第3章は、純粋にソフトウェア工学の論文といった趣きであり、他の章に比べて一段と専門的である。そのため、ソフトウェアの計量化について体系的な知識を望む読者にとって、十分に応える内容である。ただ、他の章との専門的レベルの差に、ややとまどいを持たれる可能性はあるであろう。

わが国におけるソフトウェア生産管理の今後は、日本の民族性に根ざした日本的QC、IEの成果を、いかにとり入れるかに大きく依存することは疑う余地がない。その意味で、本書に示された指針は貴重な一石であるといえよう。ソフトウェア畑に生きるあらゆる層の人々にぜひ一読をお勧めしたい。そして、本書に示された指針に沿って、ソフトウェア生産管理のあり方について今一度考える機会としていただきたいものである。

(八巻直一 ㈱システム計画研究所)